

## 同和問題（道徳）学習指導案

平成3年9月26日（木）第5校時

板野中学校3年C組

男子18名 女子19名 計37名

指導者 仁木真之

### 1. 主題 強く生きる

資料 「私は負けない」

出典 人間の最も人間らしい生き方—同和問題意見発表から学ぶ—

### 2. 主題設定の理由

3年前に本校に赴任し3年生を担当した。そのクラスも約25%の対象地区の生徒が在籍していた。しかしながら一年間、進路指導に追われているという言い訳を作り上げ、生徒とともに胸を開いて同和問題について語ることは無かった。わずかに記憶にあるのは同和問題の啓発映画鑑賞の事前指導と校内同和問題意見発表会を控えての生徒への働きかけぐらいなものである。事前指導のときに「腹が立つ！」とうめくように叫び鉛筆を折ったT男の姿が臉に焼き付いて離れない。卒業すれば必ず部落差別の問題に直面するときが来る。板野ということで特別の目の持ってみられそれから逃れるために自分を殺したり、「あの子は……」という形で差別者としての自分を作り上げてしまうことがある。「堂々と胸張って故郷を名乗る」ことのできる生徒を育てることは板野中学校の3年生を担当するものにとっては、避けることのできない極めて現実的で重要な課題である。なにをにおいても取り組まねばならない課題である。しかしながら、T男のクラスではそのことができなかつた。できなかつたというより「しなかつた」。安易な道に逃げたという痛恨の思いがある。

徳島市内の高校に進学したT男が夏休みに遊びに来た。雑談から同和問題の話になったが「先生、僕土木関係の会社に就職しようと思とる。ほっちの仕事は就職差別やあんまりないし…。クラスでもだれが地区出身の子か知らん。あんまり考えとうないし…。ほんでも、結婚のときは考えるだろうなあ。」と話す。クラスのリーダーの一人であり正義感の強かつたT男にたいして中学時代に真剣に同和問題について語り合う姿勢があり、そのための時間をとっていたらもっと積極的に差別問題に取り組むことができたのではないか。どうしても伏し目がちになるT男をみながら、すまないと思い、また苦しくもなつた時間であつた。

同じクラスにいたM子は中学3年のときに校内同和問題意見発表会において全校生徒前で部落宣言をした生徒である。この生徒も徳島市内の高校に進学した。時々近況など知らせてくるがこの夏休みにも手紙をくれた。

「…友達でNさんていう子がいるんだけどその子には、私が地区出身じゃということを行いました。今、一番信用がおける友達だからです。1年のころはこんな

こと3年間誰にも言うことはないと思っていました。けど、信用のおける友達にさえも打ち明けれんのはちょっとおかしいと思って決心しました。打ち明けるときは緊張しました。いろんなことが頭をめぐりました。「この何秒か後にこの子は私と口を聞かなくなるかもしれん。」「一人の友達をなくすのかもしれない。」心臓もドキドキしました。そして、「私、地区出身なんよ。」と言った瞬間、友達は「ほんなこと気にせられん。JちゃんはJちゃんじゃ。T高に来てJちゃんと友達になれたんは1億2千万分の1の確率なんじよ。こんな確率の中でこうやって話ができる友達になれた私はラッキーなんじよ。」と言ってくれました。これ聞いて肩の荷にが降りたような気持ちになりました。今は、この友達に打ち明けてよかったなあと思っています。もう「隠している」という重荷もないし、言いたいこと言えるし…。中学校のときは地区出身ということ打ち明けることで悩んだことはなかったけど、高校に入る前はこういうことにぶつかるだろうということはなんとなく予想はしていました。けど、この子すごいテレ屋でおもしろい子なんです。「1億2千万分の1の確率」っていうのもちょっと違う表現と思いませんか。いい友達です。……。また、中学校へ遊びにいきます。その時は、いっぱい話しよーな、先生。」

このM子の生き方に教えられることが多くある。板野を離れての不安。中学校時代は「本当に強い子になった」と感じさせてくれたM子でさえも持っている不安や苦しみ。その中で、友を得、地区出身であることを打ち明けて前進していくM子。その土台を作るのは中学時代にしかない。「中学では地区出身を打ち明けることで悩んだことはないが、高校ではこういうことにぶつかるだろうと予想していた」M子の思いは今の中学生にそのまま通じていくことである。「胸張って故郷を名乗る」ことの意味と重さを感じ、言葉だけで終わらせてはならないことを痛感する。丸岡さんの「ふるさと」に歌われたことは遠い国のことではなく目の前の生徒の現実にかかわる問題である。生活の場面が変わる度に繰り返されるにちがいない。だからこそどこへ出て顔も挙げ胸張って進んで欲しいと思う。

3年生は昨年度より全体学習を取り入れ積極的に同和問題学習に取り組んできた。互いの本音のぶつけあいが見られ、涙を流しながら自分の思いを語る生徒の姿があった。全体の前で部落宣言をし、顔を挙げ自信を持って進もうとする生徒が増えてきた。

しかし、まだまだ「日暮れて、道遠い」というのも現実である。本クラスにおいては学習会に参加しながら自分が地区出身であることの自覚がなかった生徒が2名いた。家庭訪問を続け保護者と話し合い、一対一で、また学習会の場において地区出身であることを知らせていった。しかし、具体的な差別を受けたことがないということでまだまだ自覚や取り組み方に不十分な点が見られる。本音が出したことにより、地区の生徒であってもその保護者の考えの違いもあり、同和問題

に対する意識や姿勢にかなりの違いがあることが見えるようになってきた。「もう差別はない」と考えている地区出身の生徒も存在している。誰も考えたくない問題であり、できることなら避けて通りたいと思う。しかし、全体学習の中からそれが許されることではないことを自分の問題としてとらえるようになってきつつあり、今こそ真正面からこの問題に取り組まねばならない。

板野から出たときに自分の故郷を話すことができ、友人に自分の苦しみを語り同和問題についてともに闘うことのできる仲間作りができる人間であって欲しいと思う。M子の感じたように、今は何の抵抗もなく話し、できていることが新しい環境の中では難しくなり「隠す」ことになり、逃げることにつながっていく生き方だけはして欲しくない。また、地区外の子には自分が地区外であることの「証」として差別を拡大してしまう誤った生き方を繰り返して欲しくない。2年間ともに考えてきた根本は人間としていかに生きるべきかということであった。仲間を信じ、連帯の和を広げ差別の解消に向けて新しい環境の中でも力を尽くして行って欲しいと考えている。今の同和問題学習の大きな願いの一つがそこにある。今日の前にいる生徒全員に、校内の同和問題推進委員としても活躍しているM子をこえる力を持って欲しいと思う。3年生であるがゆえの切実なる願いである。

資料「私は負けない」は県の同和問題意見発表におけるこの10年間での優秀作品のうちの一つであり、差別に気づき、苦しみの中から立ち上がっていく過程は同じ中学3年生として生徒に共感を呼び、これからの自分たちの生き方を考える上で意味がある。また、差別をした友達をも包み込んでいく「友達が大切にする」ということの意味。「堂々と故郷の名がいえ子にならなければいけないんだ」という主張は進路選択を目前に控え新しい社会に飛び立とうとしている生徒に強く生きるための大きな力を与えてくれるものと考え本主題を設定した。

### 3. ね ら い

「私は負けない」の資料を通して堂々と胸張って生きようとする作者の考えに共感させながら、中学卒業後の自分を見据えての、差別に負けることとない、差別を許すことのない強くたくましい生き方をしようとする態度と実践力を育てる。

### 4. 視 点 集団と連帯

### 5. 指導計画

- ① 常時指導 「あゆみ」、学年通信などを通じて常に生徒にはなしかける場を持ち、生徒とともに考えていく。また、ともすれば自

分一人のカラに閉じこもりがちになる時だけに級友の考えや思いを知る中から連帯感の高揚を目指す。

② 関連的指導 学級活動 「学級」

クラスに一人の登校拒否の女子生徒がいる。級友や多くの人の働きかけによって6月中旬より登校を始めたが、送り迎えをし、登校しても職員室に座っている毎が続いていた。9月に入り一人での登校ができるようになり、授業にも2回ではあるが出席することができるようになった。後一步を目前にしてクラスとしてどう取り組むか、全員が揃うということの意味について考え実行に移す。

- ③ 核心的指導 第一次 私は負けない…………… 2時間（本時1 / 2）  
第二次 水平社宣言…………… 2時間  
第三次 水平社宣言讃歌…………… 4時間

④ 発展としての関連指導 学級活動 「自分の未来設計」

中学卒業後の自分の生活を考え、夢や希望の実現のために何をしなければならないか、また何が必要かを考えさせる。とくに地区生徒にたいしては同和問題から目を反らせた生き方でなく正面からそれを見据えた生き方を考えさせる。

⑤ 常時指導（発展）

3年生にとっては常に進路の問題がつきまとう。避けては通れぬ道である。自分一人に閉じこもり、排他的になり、不安と焦りの中で級友をもライバルとだけしかみない傾向も否定できない。そのようなときだからこそ、支えあう学級集団ということを手を単に言葉におわらせることなく、具体的な毎日の生活の中で、本音を出し合う話合いや、作業等における協力、登校拒否生徒に対する働きかけなど積極的に進めていきたい。

6. 本時の指導

① 目標

資料「私は負けない」を通して差別に負けず、差別を許さない生きかについて考えさせ、卒業後の具体的な自分の生き方のなかで同和問題の意味はなになのかを問い、どのような場においても逃げることなく差別解消に立ち向かう態度を育てる。

② 展開

3年生にとっては常に進路の問題がつきまとう。避けては通れぬ道である。自分一人に閉じこもり、排他的になり、不安と焦りの中で級友をもライバルとだけしかみない傾向も否定できない。そのようなときだからこそ、支えあう学級集団ということを手言葉におわらせることなく、具体的な毎日の生活の中で、本音を出し合う話合いや、作業等における協力、登校拒否生徒に対する働きかけなど積極的に進めていきたい。

## 6. 本時の指導

### ① 目標

資料「私は負けない」を通して差別に負けず、差別を許さない生きかについて考えさせ、卒業後の具体的な自分の生き方のなかで同和問題のもつ意味はなになのかを問い、どのような場においても逃げることなく差別解消に立ち向かう態度を育てる。

### ② 展開

学習活動	主な発問と期待される生徒の反応	指導上の留意点
「私は負けない」を読んだ感想を発表する。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ この発表を聞いてどんなこを感じたか。</li> <li>・ この人はとても強い人だと思う。</li> <li>・ 差別をした人はどんなつもりで言ったのか。そのことに腹が立つ。</li> <li>・ 初めは差別した人まで友達になったというところに感動した。友達を大切にすることについて考えたい。</li> <li>・ 自分もこの人のようにふるさとの名が言えるように強くなっていきたい。</li> <li>・ 家族のあり方について考えた。このような問題を家族で話し合えるのはすばらしい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ いろいろな感想が出るだろう。本人の生き方に関するこ、友達に関するこ、家族に関するこ、自分自身とのかわりに関するこなどに整理したい。</li> <li>・ 意見発表会という場での発表であることを確認しておく。</li> </ul>
「同和地区なんやってな」という言葉について考える。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ この友達はどんなつもりで言ったと思うか。また、そのことをどう思うか。</li> <li>・ 深い考えはなく好奇心でいった。あまり責めてもしかたない。</li> <li>・ 深い考えなしに言ったことは自分がしていることの意味がわかってない。相手の気持ちをもてあそんでいる。</li> <li>・ どんな反応を示すかみようとした。許せない。これが差別なのだということを教</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ なにげない言葉の中にひそむ差別性をとらえる。</li> <li>・ こういった形の差別が身の周りに数多く起こる可能性があること。どのように対処していくべきかを考える伏線したい。</li> </ul>

	<p>えていかなければいけない。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ いじめ、さげすもうとしていった。許せない。</li> </ul> <p>○ わたしの気持ちはどうだっただろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 腹立たしく、悲しい思い。</li> <li>・ 憤りを感じた。相手を許せないと思う。</li> <li>・ これからの不安。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ここでは発表者の気持ちについては時間をかけない。</li> <li>・ 差別するものとされる者のギャップをおさえる。</li> </ul>
<p>その後のわたしの生き方について考える。</p>	<p>○ 苦しみやいきどおり、逃げようとする気持ちから立ち直った私は「友達を大切にするという本当の意味をしった」と言っているがどういうことか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 差別した友達をも変えていく力に感動した。</li> <li>・ 本音で話し合うことなくして本当の友達はできない。</li> <li>・ この友達も自分の言葉の持つ意味が初めわかった。互いに本音を出し合って初め本当の友達になる。</li> <li>・ ひどいことを言われても友達として付き合い合うことができていくわたしはすばらしいと思う。</li> </ul> <p>○ 「堂々とふるさとの名を言える子にならなければいけないんだ」ということの意味について考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ふるさとの名を言えるということは差別に立ち向かっていくということである。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 友達の意味と本音で話すことの意味を全体学習の経験をもとにつかませたい。</li> <li>・ 差別をした友達さえも友人として差別解消に取り組もうとするわたしの強さに注目させる。</li> <li>・ 仲間の支えは卑屈な態度や問題から逃げることから生まれるのではなく、強く生きようとする姿勢から作り上げられるものであることをつかませる。</li> <li>・ 卒業後の自分の生き方とオーバーラップさせる意味で考えさせたい。</li> <li>・ ふるさとの名を言えるためにいますべきことはなになのかを常に考えていたい。</li> </ul>
<p>先輩であるM子さんの手紙からも卒業後どのように生き方を求めようとしているか考える。</p>	<p>○ 板野を離れたときどのような生き方をしていこうと思うか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 本音で語るこのことのできる友を得て差別に負けないように生きる。</li> <li>・ 友達の苦しみを自分の問題としてともに考え、差別を許さない生き方をしていきたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ M子の手紙から卒業後の生き方を現実的な自分の問題としてとらえさせる。</li> <li>・ 差別をしない、させない視点を強調していきたい。</li> </ul>

## わたしは負けない

中学校 3年

みなさん、私はいま、自分の持てるだけの勇気をふるい立たせて、ここに立っています。私の友だちへの気遣いから、何度この発表をやめようと思ったかわかりません。でも、いまやめてしまうと、自分の心にも、そして差別を受けている人たちにも嘘をついてしまう、差別から逃げてしまうことになるのです。いろいろ考え、悩んだ末、やはり言わなければいけない、言うべきだと思ったのです。

それは2年前のことでした。中学校に入学して、私は楽しい日々を過ごしていました。ところが、1か月、2か月と過ぎていくうちに、ある友達のひとことで、楽しさが悲しみに、そして腹立たしい思いになりました。

「あゆみちゃんて、同和地区なんやってな。」

と、いかにも好奇心に満ちたように言われたのです。私は、まるでがけから突き落とされたような気持ちになりました。それは、私が一番恐れていたことだったからです。心臓が激しく鼓動を打ち、そのあとはもう上の空でした。

こう言われたのは私ひとりではありませんでしたが、（なんでこんなふうに言われんといかんの。）と、腹立たしく悲しく思いました。

みなさん、みなさんには、この私の気持ちがわかりますか。いい友達だと思っていた人から、この言葉を、いきなり刃物で胸を突き刺すように言われた私の気持ちを。

同和地区というのはもうなくなっているのだ、関係ないのだ、と思っていたのに、「同和地区やってな。」という一言で、友達がひとり、ふたりと減っていきました。

私は、この悲しさから逃げたいと思いました。できるなら、「同和地区」なんていう言葉のない所へ行きたい、そんなふうにする友達のない中学校へ行きたいと思いました。

私はその日、泣きたい気持ちをやっとのことで抑えて家に帰り、そして父母に全て話しました。

すると、今にも泣きだしそうな私を、鋭い目つきでにらみつけながら、母がこう言いました。

「あゆみ、そういう差別は、学校だけでないんよ。大人になってもあってな、そんな差別がいやになった人は他の所へ引っ越して行っきゃんよ。でもな、お父さんもお母さんも、あんたらにはそんな差別から逃げるような教育はしてないつもりじゃ。逃げたらあかんよ。し

---

**学習のポイント**

- 1 “考えて 人の痛みの 深さまで”という高校生の作った標語があります。「なにげなく」発する一言のなかに、どれだけ深い差別心が潜んでいるかを考えてみましょう。
- 2 差別を見抜く力をつけるために、私たちは何をしなければならないのでしょうか。

っかりせんと。」

そばでいっしょに聞いていた妹も、うんうんとうなずいていました。私はその時、何だか胸の中がすっとしたように思いました。自然に顔が上がるのが不思議なくらいでした。そんな私の表情を見て、父がにっこりと笑いかけました。私は、ああここに生まれてよかったと思いました。こんな家族に囲まれて、私は、ほんとうに幸せだと感じました。

私は、学習会で、同和カルタを使って遊んだことがあります。その中の1枚に、

“堂々と ふるさとの名が 言える子に”

というカードがあります。このカードの言葉の意味を、自分が体験して、母から話を聞いて初めて理解できました。

あってはならない部落差別。しかし現実には、まだまだ人の心に残されているのです。これまでどれだけ大勢の人が憎むべき部落差別に立ち向かって行ったことでしょうか。でも、私自身に突きつけられた差別の言葉によって、私は、部落差別がなくなっていないことを知りました。そして思いました。学校や社会で行っている同和問題学習とは、一体何なのだろうか、と。

ひとりの人間を、これほど傷つけ、悲しみにおとし入れるもの、それが差別なのです。それが差別の恐さなのです。この現実を知らないで、差別はいけないと叫んでも無駄なのではないでしょうか。

私は負けません。父や母は、自分の生まれた所を大切に、誇りをもって生きていくように教えてくれました。そして、かけがえのない友達も大切にするように教えてくれました。

私に「同和地区やってな。」と言った友達とも、その後話し合った結果理解してくれました。その友達とは、今まで以上に仲良くしています。私は、その友達をいつまでも大切にしていきたいと思います。

人は誰でも、誤ちを犯すものです。でも、その誤ちを反省しなければ向上しません。

友達を大切にするという本当の意味を、私はそのできごとで学んだような気がします。そしてそれ以上に、差別の現実から逃げてはいけないんだ、堂々とふるさとの名が言える子にならなければいけないんだ、という正しい生き方を学んだように思います。

私は負けません。そして正しい人間関係をこれからも考え続けたいと思います。

---

3 「支え合う友達を大切にする」ということは、具体的にどうすることなのか考えてみましょう。